

研究動向

青山学院女子短期大学の歴史と現在

1. プロジェクトの研究目的

本学の通史としては創立25周年に『青山学院女子短期大学の歩み』（1975年、以下『25年史』と略称）が出された。創立50周年には『50年の歩み』（2000年）が刊行されたが、これは通史の形はとっていない。

『25年史』刊行後の四半世紀は、男女雇用機会均等法の施行等の影響もあり、女性の社会的位置づけが大きく変化し、それに伴い、女子高等教育および短期大学教育のあり方が問われてきた。少子化による18歳人口の減少、女子の四年制大学志向は加速度的に進行し、女子短期大学に入学してくる学生の資質や気質、あるいは卒業後の進路や歩み方にも質的变化が現れている。

本学はこのような時代の流れにどのような影響を受け、それをどう受け止め、どのように応答してきたのか、その歩みには他の女子大や短期大学とは異なる特質が見られるのかどうか。また他の先進国の短期女子高等教育と比して、どのような特徴があるのか……。本プロジェクトは、このような観点から、主として『25年史』以後の歩みを調査研究し、それを通して女子高等教育機関としての本学がおかれている現状を歴史比較史的に位置づけ、見定めることを目的としている。

またこのプロジェクトは、結果として、本学の60年史編纂の準備作業としての位置づけをも有することになる。従って、『25年史』以前に遡った本学の制度的変遷や卒業生の動向調査も行うこととする。

2. 研究員と研究分担

清水康幸（一般教育科目 教授 プロジェクト

代表）：本学の制度的変遷

河見 誠（家政学科 教授）：前史および戦後の本学の歩み

鈴木直子（国文学科 准教授）：女性の社会的
位置づけの変化と本学の歩み

菅野幸恵（子ども学科 准教授）：本学卒業生
の意識・進路の調査研究

鈴木俊之（子ども学科 専任講師）：女子高等
教育の変遷と本学の歩み

3. 研究計画と研究経過

研究計画としては、①文献研究、②調査活動、③講演会活動、の3つの柱をたて、すでに1年半を経過している。具体的な研究経過は次のようであった。

①文献研究としては、共通文献として、上記『25年史』、『50年の歩み』の他、青山さゆり会編『青山女学院史』（1973年）、松井真知子『短大はどこへ行くージェンダーと教育ー』（勁草書房、1997年）、佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』（東大出版会、2002年）、『現代アメリカのコミュニティ・カレッジ』（東信堂、2006年）、女性学教育ネットワーク編『女性学教育の挑戦』（明石書店、2000年）等を揃え、数度にわたる学習会を実施してきた。また卒業生アンケート調査にそなえ、本学が過去に数次にわたって実施してきたアンケート調査報告書を取りそろえ、その分析を行った。

②調査活動としては、卒業生に対するアンケート調査およびヒヤリング調査を行ってきた。具体的には次のようである。

(1) 卒業生アンケート調査(第一次)……2007
年10～11月

(2) 卒業生ヒヤリング調査(第一次)……2008

年2～3月

(3) 卒業生アンケート調査(第二次)……2008年10月

(4) 卒業生ヒヤリング調査(第二次)……2008年11～12月

卒業生アンケートは第一次調査が1975年以降の卒業生に的を絞って実施し、第二次調査は1975年以前に遡って実施した。これを従来のアンケート報告書と合わせて分析すれば、卒業生の意識や進路、ライフサイクル等に関する経年的な推移がかつてなく明らかになるものと期待される。また、従来は行っていないヒヤリング調査を実施することにより、よりリアルな実態を知ることができつつある。

③講演会活動は次のように行ってきた。

(1) 佐々木啓子氏「女子校等教育機関の変遷と青山女学院の特質」2008年1月28日

(2) 内海崎貴子氏「高等教育機関における女性学教育—15年間の『女性学』授業実践

から見えてきたこと—」2008年3月18日

いずれも共通文献の学習会活動の延長として実施されたもので、佐々木氏の講演は歴史的視野から、内海崎史の講演は女子短期大学の教育内容面から、本学の教育活動のあり方を探ろうとしたものであり、いずれも有益な示唆を得ることができた。なお、2008年度中にあと2回ほど講演会を予定している。

4. 研究調査の現状と展望

本プロジェクトがもっとも力を注いできたものは卒業生アンケート調査であるが、その調査結果の本格的な分析はこれからである。またアンケート調査を正確に位置づけるためにも、歴史的・社会的背景や制度的変遷についての研究をさらに進めていく必要がある。

(記：プロジェクト代表者 清水康幸)